

東日本大震災と文化資源

宮城県気仙沼市小々汐地区から

The East Japan Great Earthquake and Cultural Resources :
A Case Study of Kogoshio District in Kesen-numa City, Miyagi Prefecture

小池 淳一

KOIKE Jun'ichi

- ① 本稿の課題—瓦礫から展示へ
- ② 文化財から文化資源へ—民俗文化における適用の可能性
- ③ 気仙沼・尾形家の歴史民俗的位置—地域文化の核としてのオオイ
- ④ 気仙沼・尾形家の年中行事—盆と正月
おわりに—展示における民俗表象と今後の課題

【論文要旨】

東日本大震災後の日本社会において、民俗文化がどのような意味を持ちうるのか、具体的には被災地の瓦礫のなかから民俗文化にかかわる資料を救出することはどのような意味を持ち、さらにそれらは博物館における展示においてはどのように表象されるのだろうか。こうした点について本稿では筆者自身が関わった国立歴史民俗博物館の文化財レスキューの経験や実感を通して考察する。

本稿ではそうした意識のもと、まず民俗事象を民俗文化財ではなく、表題に掲げた文化資源という概念でとらえる意義について近年の研究動向をふまえて確認する。次にその主要な対象であり、前提でもあった宮城県気仙沼市小々汐地区のオオイ（大本家）尾形家の歴史民俗的な位置づけを行う。さらに同家を舞台として伝承されてきた民俗として年中行事、特に盆と正月を取り上げ、具体的に記述する。そして最後にそうしたイエ（家）の年中行事を歴博における展示としてどのように構成したかについて述べてみたい。

【キーワード】 文化財, 民俗文化, 年中行事, 盆, 正月, 展示